研究ノート

教職員と留学生が対等に交流することの意義
―交流会参加者のアンケート分析から―

張　家寧*，杜　姝瑾，廖　穎彤
日本大学文学研究科教育学専攻

The Significance of Equal Relationships Between International Students, Faculty, and Staff: An Attempt of an International Student-led Exchange Meeting

Jianing ZHANG, Shujin DU, Yingtong LIAO
College of Humanities and Sciences, Nihon University

In order to find a way to support international students in dealing with their anxieties and concerns in the COVID-19 pandemic's aftermath, a project called "Networking Sessions as a Space for Relaxed Talk" was implemented This project was led by international students, aiming to create opportunities for themselves, the faculty, and staff to interact with each other, and give voice to their worries and anxieties through discussions in a relaxed atmosphere. An analysis of the questionnaires regarding the exchange sessions revealed the following. In order to achieve equal communication in a relaxed atmosphere and provide support based on the international students' needs, establishing equal relationships between these students, teaching staff, and Japanese students, is an important prerequisite for communication.

キーワード：交流会，対等的な交流，留学生の悩み，留学生支援，学生と教職員の関係

Keywords:
Exchange Meetings, Equal Exchange, Concerns of International Students, Support for International Students, Student-Faculty/Staff Relationships

はじめに

2020年度前期は多くの大学で全面遠隔授業となり，学生の生活は激変した。友人，家族および教職員との接触が制限され，授業や課外活動等において，他者とのコミュニケーションの機会が著しく減少した。濱名（2021）によると，日本の学生はコロナ禍で学習と生活の両面で様々な困難に直面しながら勉学に臨んでいる。2022年度前期には多くの大学で対面授業が再開されたが，それに伴い学生の間に新たな不安が生まれた。留学生もコロナ禍の約2年間に様々な困難に直面し，不安を抱えており，それによるストレスや悩みが多くなっている。その中には，個人での解決が難しく，大学側による適切な支援が必要なこともあると考えられる。そこで，コロナ禍以降，留学生がどのような不安や悩みを抱いているかを解明し，それに対してどのような支援をすべきかを考えるのが重要な課題となる。以上の課題に取り組むために留学生主導による

*E-mail: jianingzz0601@gmail.com
投稿：2023年1月21日　　受理：2023年2月24日

交流会を試験的に実施し，それについてのアンケート調査を分析した。

1　先行研究と先行事例の検討

各大学には，留学生の学習や生活を支援し，教室内外で生じた困難や悩みに対応するための機関が設けられている。そして，カウンセリング制度，留学生チューター制度などを通じて留学生の環境整備に努めている。しかし，これらの留学生支援制度には課題がある。例えば，留学生を対象としたカウンセリングには支援者側の異文化理解が必要である（金城，2007；許と松田，2016）。また，猪又と西村（2022）はチューター制度に関して，チューター学生のニーズと留学生のニーズのズレによって留学生の期待にチューターが答えられないことがあるため，留学生にサポートしてほしい内容やニーズを事前に調査するべきであると指摘している。しかし，木村（2022）によると，教職員が学生に学生相談機関の利用を勧めるにあたり，まず学生の相談ニーズを把握する時点で困難を感じるという。

このような研究を踏まえると，留学生には本当の悩みや不安およびニーズを話せる場が必要であり，支援側としての学生や教職員には留学生の声を直接ヒアリングし相互理解を促進させる機会が必要である。留学生と教職員の交流会はその意味で重要な活動であるが，交流会の形式によってはねらいが達成されないこともあるため，望ましい交流会の形式について探究する必要がある。

そう考えると，次の活動が参考になる。京都産業大学では，学生の主体性や学習モチベーション発揮に向けた支援を模索するための取り組みとして，「学生×教員×職員　しゃべり場」という活動を実践した。その活動の目的は本実践と異なるが，「学生×教員×職員」の三者が参加するしゃべり場という形に注目したい。「しゃべり場では，学生の声を直接ヒアリングすることを通じて，オンライン授業の物理的・心理的な障壁を明らかにすることができた」（福原と岡，2021）と評価されており，学生の声を直接に聞く機会として重要なものだったといえる。これは留学生交流会にも応用できると考えられる。教職員が交流会に参加し，留学生の声を直接ヒアリングすれば，コロナ禍以降に生じた留学生の不安や悩みが明らかになるであろう。また，一般の日本人学生は留学生との付き合いや交流に不安や悩みを持ちながらも，留学生との異文化交流を求めている（梶原，2020）。そのため，交流会には留学生だけではなく，教員，職員，日本人学生といった多様な立場に立っている人々の参加を求めることが重要である。

一方で，留学生と日本人学生の交流活動において，援助する側とされる側の関係が一方向的に固定されるのは両者間の関係の発展にとって好ましいことではない（横田，1999）。交流活動を考える時，関係の構築という視点を取り入れることも必要である。このような交流においては，「対等な関係」の必要性も指摘されている（花見，2000）。援助する側とされる側の関係が一方向的に固定されるのではなく，対等な関係の下で交流を進めることができれば，参加者のニーズも共有されやすいであろう。

以上の考察を踏まえ，①留学生の声を直接に聞く，②留学生だけではなく，多様な立場に立った人の参加を求める，③参加者はリラックスして対等に話せる，という３点を重視した交流会を実施した。本交流会は一過性の留学生支援にとどまらず，他の留学生支援の改善にも応用できると推測する。また，学生×教員×職員の交流において，互いに対等な交流を成立させるための条件とは何か，今回の実践を通じて再考察できると考える。本稿では，参加者のアンケートを分析しつつ，交流の場やその形式の可能性という視点から留学生への支援のあり方を探索する。

2　事前準備と交流会の概要

交流会のプログラムを工夫するために，事前準備として予備調査と予備交流会を実施した。

まず，予備調査について説明する。コロナ禍以降に留学生がどのような悩みを持っているのかを把握するため，予備交流会を実施する2週間前にアンケート調査を行った。実施期間は2022年6月6日から同年6月16日まで，調査対象は文理学部に在籍する留学生で，回答者は19名であった。事前アンケートでは，「授業面」「サポート体制や支援のあり方」「授業面とサポート体制や支援のあり方以外の悩みや問題」「大学以外の生活面」の4つの面から，問題点，不満・不安，悩みを聞いた。回答結果を内容ごとに整理すると，回答者の悩みは「人間関係（教員との関係，日本人学生との関係）」「卒業後の不安」「学内設備」「授業・成績関連」「奨学金の充実」の五つの項目に分類することができた。

次に予備交流会であるが，期間は2022年6月30日15：00～17：00，場所は日本大学文理学部本館5階ML/TL教室で開催された。予備交流会の参加者は，留学生10名（学部生6名，大学院生4名），教育学科助手2名（うち中国人1名），教員2名の計14名である。交流会のねらいは，①交流会の企画・実施を学生主導で行うことにより，交流相手にとっても自分たちにとっても有益な交流活動を実現すること，および②教員・職員・留学生の三者が協働して，混合チームを構成し，コロナ禍で生じたそれぞれの悩みや困難をテーマに交流すること，である。予備交流会は，①予備アンケートの結果報告，②留学生，教職員の悩みやその解決策についての自由交流，③クイズ形式のゲームという流れで進行した。予備交流会【当日は「予備交流会」ではなく，「交流会」という名称を使った】の後には，学生参加者に対しアンケートを実施した。アンケートには自由記述と併せて，「本日の交流会について，感想をお聞かせください」という項目を設けた。この項目への回答は留学生7名から得られ，回答の内容を精査した結果，普段の教室での個人的な交流とは違い，リラックスした雰囲気の中で，先生の違う一面を見ることができ，先生との距離が縮まったと留学生が感じていることがわかった。

これらの取り組みから，筆者らが最初に想定した実施方法の意義が見えてくる。即ち，①留学生の声を直接に聞く，②留学生だけではなく，多様な立場に立った人の参加を求める，③参加者は対等に話すことができる，という3つの切り口で，リラックスした雰囲気をつくることである。そこで，本番の交流会のデザインも，リラックスした雰囲気の醸成に重きを置いた。

交流会は，2022年10月30日15：15～16：30，「日本国際教育学会第33回研究大会」のなかの1つのセクションとして，zoomにて開催された。参加者は，留学生10名（うち2名は他大学所属），日本人学生3名，教職員6名（うち2名は他大学所属）の合計19名であった。それ以外に，交流会の企画者である留学生3名と指導教員1名がいたが，全員日本大学に所属している。開会の挨拶の後，交流会の流れは，①事前準備の結果報告と交流会の説明，②グループに分かれて交流，③グループ交流の感想を全員に向けて自由に発表，というものであった。②については，5つグループに分かれて，可能な限り学生や教職員，大学内部参加者や外部参加者などが固まらないように属性による振り分けを行った。

3　アンケートの分析と考察

ここでは，主に本番交流会の事後アンケートを分析し，そこから得られた知見について考察する。必要に応じて，予備調査のアンケート・予備交流会の事後アンケートの記述，および2回の交流会の様子も分析の対象とする。なお，筆者補足や注釈を入れる場合は亀甲括弧を用いている。

アンケート記入者の属性構成は，留学生８名，日本人学生２名，教員１名，職員２名（うち他大学所属１名），合計13名である。また，留学生は学部生４名と大学院生４名（うち他大学所属１名），日本人学生は全員日本大学の大学院生であった。アンケートには，属性に関する質問以外に，「4　交流についての考え」「5　交流会を通じて得られたもの」「6　交流会の全体的な感想」という３つの質問を設定した。本節では，アンケート結果の分析から交流会の役割を明らかにし，参加者の間で対等な関係を構築することの意義を考察する。

表１は，アンケートの「4　交流会についての考え」の結果をまとめたものである。交流会では，参加者たちがそれぞれ異なる立場の考えを知り，相手の立場に立って考え，リラックスして対等な交流ができたことがわかった。質問項目［4－1］では，回答者13名のうち12名が「そう思った」と回答した。そして，参加者が一番評価していたのは，対等な交流ができたことである。「対等な関係を求める交流には，共通の目標や課題，テーマに対し，同じ役割を与えると同時に，インタラクティブな活動を働きかけること，といった工夫がみられる」と茂戸（2012）は指摘しているが，今回の交流会はこの知見に合致するものだった。今回の交流会は「コロナ後の悩み」をテーマとしたことで，多様な立場の参加者が悩みや情報を共有する場として機能し，相互にアドバイスしあうという協働の関係が形成されていたといえる。

では，対等な交流会は，どのような役割・意義を持っているのだろうか。主に二点考えることができる。一点目は，対等な交流会は，留学生のニーズの把握に役立つということである。対等な交流会では，予備アンケートに記述された悩みや不安について直接に話し合い，教職員が留学生のニーズをより精確に把握できるようになった。例えば，ある教職員からの回答には「留学生の悩みを知れてよかったです。1. グループディスカッションについての悩み　2. キャリア形成についての悩みなど〔中略〕」，「〔中略〕就職についての悩みは予想していましたが，予想外の〔中略〕」などがあった。このように，対等な交流会は，教職員が留学生のニーズを把握するのに役立った。

二点目は，対等な交流会は，学生×教員×職員の相互理解・異文化理解を促進するということである。表１の質問項目［4－6］・［4－7］では，大多数の回答が「そう思った」「ややそう思う」であるため，参加者は，異なる立場の人の考えを知り，また相手の立場に立って考え，異なる立場の人を理解し始めたと考えられる。具体的には，教職員からの回答として「〔省略〕異文化のギャップが伝わる経験を共有していただき，目が開かれる思いがしました」というものがあった。留学生も「ディスカッションについて行けない問題は日本語の問題だけでなく，文化の差もあるかもしれない」と回答し，文化の差異が円滑な交流の妨

表１　質問項目「4　交流についての考え」

質問項目	そう思った	ややそう思う	どちらもとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
4-1 対等な立場で話し合いができた	12人	1人	0人	0人	0人
4-2 リラックスして会話に参加できた	8人	3人	2人	0人	0人
4-3 悩みを共有することができた	9人	3人	1人	0人	0人
4-4 自分の悩みに対して他の人からアドバイスがもらえた	9人	3人	0人	1人	0人
4-5 他の人の悩みに対してアドバイスができた	5人	5人	1人	2人	0人
4-6 異なる立場で考えを知ることができた	9人	4人	0人	0人	0人
4-7 相手の立場に立って考えることができた	7人	5人	0人	1人	0人

げとなる可能性を認識し始めた。また，日本人教職員からは「日本は意見や結論をはっきり言わない文化がある」などの日本特有の文化についても紹介された。交流会の参加者は，留学生のニーズを把握しながら，お互いの文化の差異に気づき，その上で，相互理解・異文化理解へと進んでいった。「１　先行研究と先行事例の検討」で紹介したチューター制度については，留学生支援の他に，異文化理解・体験の場でもあるという認識であり，留学生とチューターの相互理解を図る場を設けることを今後検討したいと述べた（猪又と西村，2022）が，対等な交流は相互理解を図る場を設ける際のヒントになるかもしれない。

対等な交流会は，悩みや情報を共有する場として機能することで，留学生のニーズの把握と異文化理解に寄与する。では，今回の交流会が対等な交流を担保できたのはなぜだろうか。

第一に，今回の交流会には一定程度匿名性があり，参加者の間で利害関係がなかったことが考えられる。学外からも教職員や学生が参加したことにより，大学横断的な交流となった。また，注目すべき回答として，外部の職員の「留学生・日本人学生の方の生の声を聞くことができたのは貴重でした。（自身が所属する機関の学生さんは，気を使ってくれて悩みをダイレクトに伝えてくれないこともあります。）」がある。その学生は，なぜ自分が所属する機関の職員に悩みを話さないのだろうか。同じ大学の関係者に相談する場合には，自分の知り合いに伝わる恐れがあるため，本音で話しにくくなると推測できる。一方，他の大学の人に対しては，名前を出しても，個人の詳しい情報までは伝わらないため，一定の匿名性が保たれる。また，直接の利害関係もないため，気軽に悩みを伝えることができる。大学の枠を超えた交流会は，利害関係のなさと匿名性によって，参加者に気にせず話せる環境を担保していたのである。

第二に考えられるのは，対等な交流会では，「師弟関係」や「支援する側―支援される側」の間に存在する権力関係が緩和されているということである。最初の予備アンケートでは「誰とどこで相談するか〔わからない〕」，「先生と相談する勇気がない」などの回答が多かった。教職員は学生にとって権力的な存在であり，教員に相談しようとしても，硬い雰囲気の中で思ったことを気軽に話すのは難しい。一方，交流会後のアンケートでは，「悩んでいるとき，学科室・先生と相談してみる」という前向きな回答が多く見られた。交流会を経て，留学生は教職員と距離を縮めてより良い関係を築き，教職員に支援を求める姿勢を取れるようになったと考えられる。また，予備交流会では，教職員や留学生とのコミュニケーションを通じて，問題解決策を互いに提案することで，「先生との距離感が縮小し信頼感・安心感を感じた，大学の一員としての責任感や帰属意識を持つことができた」と述べる留学生もいた。ここから，交流会は，留学生にとって，教職員との関わりを豊かにし，教職員への信頼感を生み出し，良好な関係を育む場としても機能することがわかった。対等な交流会の実現には，学生と教職員の間の距離を縮めることや，権力関係の緩和が重要と考えられる。

また，一般的な学生支援の活動にも権力関係があることが伺える。留学生対象のアンケートには，「メンタル問題を討論することが多いです。〔中略〕まず，専門のカウンセリングがたりない状況が存在している同時に，支援の時差別な話を無意識に言いましたことがあります」という回答があった。実際にこの学生がどのような発言を差別的なものだと感じたのかはわからないし，専門の学科や窓口のことを言っているのかカウンセリングの専門家のことを言っているのかはわからない。しかし，教職員が支援を行う時に，差別的な言葉を無意識に使ってしまうことで，留学生がさらに傷つき，今後支援を求めない姿勢になることも考えられる。そうならないために，教職員には異文化理解が求められるのだが，差別的な言葉を無意識に使ってしまう可能性は捨てきれず，特に一対一の場面ではその問題性に気づきにくい可能性がある。他の留学生の回答には，「１回目のグループ分けは私以外は先生しかいなかった。心配したが，あとは司会も加えたおかげで無事で終わった」というものもあった。司会役という第三者が入ったおかげで，一対一の時に感じた権力関係が緩和されたのであろう。つまり，交流会では，多様な立場の人の参加によって，権力関係を緩和させることができ，一対一の支援の限界にも対応することができる。しかし，留学生がどのようなサポートを

期待しているかを事前に調査すれば，サポートすることがなく疎遠になるという課題（猪又と西村，2022）を解決できるかもしれない。即ち，留学生のニーズ把握を当然のこととし，それらの悩みやニーズに対応できる支援体制を構築することも重要である。そこで，交流会が留学生のニーズ把握の役割を担い，そこで得られた知見を他の支援サポート機関と共有し，これを支援サポートの一環として機能させることも期待できる。

一方で，別の見方をすれば，これまでは，学生支援が行われる際に，支援する側と支援される側という非対称的な関係性であり，権力関係が生じる恐れを孕んでいたということが考えられる。留学生支援に関して，先行研究では，カウンセリング制度や留学生チューター制度に関心が集まったことにより，結果として留学生の悩み把握の方法や支援の方法についての分析が，「支援する側―支援される側」という枠組みに限定されてきたことが指摘されている（中川，2012）。この状況においては，支援側が相手を「助けてあげる」という不対等なパートナー関係が生じ，その結果，留学生の真のニーズを把握できず，権力関係がもたらす象徴的な暴力が発生する危険性も孕んでいる（虎岩，2014）。もっとも，こうした学生と教職員間の権力関係を解消するために，教職員は常に自分自身の権力性を認識した上で，学生に接する際には対等性が担保されるよう対応の仕方を検討していかなければならない。「支援」という言葉自体は，不可避的に権力関係を前提とする。ただ，重要なのは，支援する側と支援される側の間に権利関係があることを認識し，いかにして対等な関係を築くかということである。支援する側は，善意の行動であっても，自らを優位な立場に置き，相手を劣位に置く可能性があるため，権力関係を意識しなければならない。

以上，今回の交流会では，悩みや情報を共有するというテーマのもとで，異なる立場の参加者に同じ役割を持たせ，「師弟関係」または「支援する側―支援される側」の間に存在している権力関係を緩和させることができ，対等な関係のもとでの交流ができたといえる。

おわりに

本稿では，コロナ禍以降，留学生が抱えた不安や悩みに対応できる留学生支援のあり方を模索するため，リラックスして話せる場として交流会を実施し，アンケートを分析した。その結果，指摘できたのは次のようなことである。まず，留学生のニーズに合った支援を実現させるためには，留学生と教職員，日本人学生の間で対等な関係を築いて交流することが重要だと考えられる。そして，こうした対等な交流会は，情報・経験共有，関係作りなどの場として機能し得る。また，大学の枠を超えた交流では，より多角的な視点が得られる可能性があり，また，匿名性があるために利害関係を気にせずに，参加者が話しやすいというメリットがある。留学生支援においては，支援する側と支援される側の間に，権力関係があることが考えられる。こうした権力関係を解消するために，教職員は常に自身の権力性を認識し，対等性が担保されるよう学生に接していく必要がある。

引用・参考文献

猪又由華里・西村政子（2022),「留学生チューター制度の現状と課題」『Journal of Inclusive Education』第 11 巻，131-140 ページ.

梶原雄（2020),「日本人学生は外国人留学生をどう見ているか―同志社大学の日本人学生からの視点―」『同志社大学日本語・日本文化研究』第 17 号，93-111 ページ.

木村真人（2022),「大学教職員が学生に学生相談機関の利用を勧める際に感じる困難と工夫」『国際研究論叢：大阪国際大学紀要』第 35 巻第 3 号，147-159 ページ.

許倩，松田英子（2016),「在日中国人留学生の異文化適応支援の現状と問題―異文化ストレス，留学生のパーソナリティからの分析―」『東洋大学大学院紀要』第 53 号，63-76 ページ.

金城かおり（2007),「留学生担当者のための異文化理解教育の意義と必要性」『言語文化研究紀要』第 10 号，121-142 ページ.

茂戸藤恵（2012),「留学生との交流による日本人学生の変容―海外勤務志向への変化に着目して―」『Works Review』第 7 号，22-35 ページ.

虎岩朋加（2016),「日本の留学生政策と実践に内在する象徴暴力」『ジェンダー & セクシュアリティ』第 11 号，79-89 ページ.

中川かず子（2012),「日本人学生と留学生の異文化交流―異文化接触，協働的活動を通した大学教育への適応と意識変容」『ウェブマガジン「留学交流」』第 13 巻，1-10 ページ.

花見横子（2000),「日本人学生と留学生との交流：対等な関係の模索（その 1)」『三重大学留学生センター紀要』第 2 号，53-66 ページ.

濱名篤（2021),「コロナ禍における学生の不安と支援のあり方　安全対策以上に求められる安心対策　学生の実態状況調査」『リクルートカレッジマネジメント』第 39 巻第 2 号，30-33 ページ.

福原由衣・岡和寛（2021),「教育支援研究開発センター「学生×教員×職員　しゃべり場」活動報告」『高等教育フォーラム』第 11 号，67-70 ページ.

横田雅弘（1999),「留学生支援システムの最前線」『異文化間教育』第 13 号，4-18 ページ.